



安齋 政夫さん・チ工子さん(両竹)

取材者：特定非営利活動法人寺子屋方丈舎 江川
取材日：平成29年11月20日

今を大切に生きる



▲政夫さんとチ工子さん ご自宅玄関前で

請戸は遠浅で、津波が来ないと言われていたんだけれど、とにかく、親戚と一緒に行政の指示に従って、サンシャイン浪江へと避難しました。翌3月12日には、津島経由で福島市まで避難しました。その後、二本松市内のアパートに落ち着いて避難生活を続けま

◆人の役に立つことが大好き
政夫さん 私は、体を動かして働くのが大好きです。77歳の今も、時々、植木屋の仕事をしています。忙しいときは週2、4日働きます。誰かに喜んでもらうことが嬉しくて、今でも近所で簡単な庭木の手入れをしているんです。
震災後は、親戚付き合いだけでなく、近所のお互い様の関係もとても大事にしています。避難先の二本松でも夫婦で卓球や、踊り、温泉通いを楽しみました。いわきに來てからは「男の料理教室」にも参加し、友達の輪を広げています。皆さん60、70歳代ですが、知らない土地で

◆健康こそが何よりも大切
チ工子さん 夫婦で楽しむのは、家庭菜園と週2回の卓球です。庭の野菜も季節ごとに豊かな実りを与えてくれます。動けるうちは、自分たちのことは自分たちでやって、できるだけ体を動かしたいです。大変なことはありませんが、自分の気持ちを塞がないように暮らしています。
政夫さん 時折は、庭木の手入れの仕事で、浪江の町にも自分で車を運転して向かいます。どこにいても、思い出のたくさんある浪江町のことは深く心に残っています。

いわき市内に自宅を新築されて5年。夫婦二人で、体と心の満足を大事にしながら「さみしさもエネルギーに」変えて元気に楽しく毎日暮らしていらっしゃいます。

◆不安な中でも決断を早く
政夫さん 若い頃から漁師として、北洋の豊かな海で船に乗って働いていました。漁師の仕事は、とても厳しかったですが、仲間にも恵まれ楽しく仕事をしていました。
チ工子さん 私は、双葉町の生まれです。昭和38年に結婚をして、二人の娘にも恵まれ、幸せに暮らしていました。
政夫さん 自宅があったのは、原発から6キロメートル余り離れたところでした。東日本大震災当日は、地震が起きた後、町の防災無線を聞き避難することを決めました。

請戸の家は全損。残念だけれども、もう請戸には戻れない。幸い、子供たちも独立して暮らしている。「小さくてもいいから家を建てて残りの人生を暮らしたい」と夫婦で相談をし、いわき市内に家を建てました。震災から2年後のことです。それからもう5年たちました。



▲大好きなカラオケで歌う政夫さん

浪江のこころ通信

●第85号●

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年3月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散して避難生活を続けています。町を取り巻く状況が徐々に変化の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

“浪江のこころプロジェクト”は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信(※1)」を通してお届けし、皆さんの思いや暮らしぶりを発信・共有しようとするものです。

一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※2)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町と連携し「浪江のこころ通信」を編集・発行しています。

- ※1 浪江のこころ通信は、町民の皆さんがお話した「こころ」を伝えることを大切にするため、取材者が聴き取ってまとめた原稿をほぼ原文のまま掲載しています。
- ※2 一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信/第85号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒979-1592
双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7-2
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0240(34)4593



郵便はがき

9791590

料金受取人払郵便

原町局
承認
1687

差出有効期限
平成31年
3月31日まで
有効

双葉郡浪江町大字幾世橋
字六反田7番地2

浪江町役場 企画財政課
「広報なみえ」担当

行

